香港便り その35

アートコレクターになる日も近い？

文　高野 陽年　text by Yonen Takano

花柄のプリントが入ったブラウスがモンマルトルの空に浮かび上がっている。ゴダールの映画で使われていそうなヴィンテージのブラウスだ。人が着ているわけではなく、服そのものを撮った写真だが、知り合いが写ったポートレートであるかのように体温が伝わってくる。60×50のモノクロの大きな写真に黒いスチールフレームがベッドルームのモスグリーンの壁紙に映えるじゃないか。ユキ・オノデラというパリ在住の写真家のマスターピースなのだが、彼女が香港で個展を開催した時に一目惚れし、パートナーとの婚約を記念して知り合いの香港の画廊から2人で購入した。僕にとって人生初のアート購入であった。

日本では僕ら庶民にとってアートは美術館に行って楽しむものだ。それはパブリックのコレクションが充実しているという側面もあるのだが、「アートの鑑賞は教養を高めるもの」という認識が強く、生活の一部になっているとは言い難い。特に現代アートは難解で敷居の高いイメージがある。『BRUTUS』や『美術手帖』で特集されているのをチラリと立ち読みするくらいがちょうどいい。アートの所有となればなおさらで、富裕層か一部の感度の高い人向けだ。お洒落なギャラリーナが一人で座るギャラリーのドアを開けるのには緊張するし、アポなしで行けば、どうせ買わない客だと思われて愛想さえも振り向けてくれない。それに比べると香港はアートが非常に身近にある場所だ。クリスティーズやサザビーズのオークション前には世界中で話題になっている巨匠の作品が無料で公開され、現代美術館である「M+」は金曜日の夜になるとダンスやクラブイベントなどが開催される。ほろ酔いで作品を楽しむことができるのだ。ちなみに、僕が住む上環エリアにはいくつものギャラリーが立ち並び、それぞれのエキシビジョンのオープニングはヴェルニサージュと呼ばれる。そこではシャンパンやワインなどが振る舞われるのでそれを目当てに行くのも楽しいのはここだけの秘密だ。

香港政府はかなりの予算を使って多くのアートイベントを招聘（しょうへい）し、香港を世界のアートの集積地にしようと目論んでいる。ここは西洋の作品が中国のバイヤーに買われ、アジアの作品が西洋のディーラーの目にふれる絶好の場所なのだ。現に世界最大のアートフェアであるアートバーゼルも香港で開催されていて、毎年3月になると世界中からド派手な作品とド派手な格好をした人が集まり、まるでカーニヴァルかの如（ごと）くだ。バーゼルに出されている作品は値段も派手なので、到底買うなんてことはできないが、アフォーダブルアートフェアなんていうのも香港では開催されている。こちらは少しお金を貯めれば買えるような手頃な作品があり、僕も次のフェアに狙いを定めている。

香港では日系の本屋で『BRUTUS』を探すことよりも簡単にアートに直接触れることができるのだ。僕もコレクターになる日は近いだろうか。その前に必死に働いてお金を貯めなくては。

Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。ヨーロッパ、北米、日本を含めさまざまな劇場における公演で主役を務めた。そして2021年7月より香港バレエ団に活動の拠点を移し、さらに活躍の場を広げている。立教大学中退。